

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：16401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720159

研究課題名(和文)アカン語3方言の比較研究

研究課題名(英文)A comparative study of Akan

研究代表者

古閑 恭子(Koga, Kyoko)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授

研究者番号：90306473

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：第一に、これまで収集してきたアカン語アサンテ方言のデータの追加調査、編集作業を行い、今年度中に語彙集を刊行できる見通しである。これは、アカン語 英語 日本語の世界初の語彙集となり、また、声調記号、名詞のクラスなどの情報も付した、唯一の現代アカン語の語彙集となる。第二に、ガーナ沿岸部における現地調査により、ファンテ方言の語彙および所有名詞形、動詞活用形を記述、収録、データ化した。このデータをアサンテ方言のデータと統合し、両方言の比較研究の基盤を整えることができた。第三に、アサンテ方言とファンテ方言のデータを用いた対照研究により、名詞の声調に関する2回の学会発表を行った。

研究成果の概要(英文)：Firstly, based on the data of the Asante dialect of Akan I had collected so far, I did additional research and editing on this. It is hoped that an Akan Vocabulary will be published within this academic year. It will be the world's first Akan-English-Japanese vocabulary with tone marks, noun classes, and other features. Secondly, by conducting fieldwork on the coastal area of Ghana, I have collected and databased a vocabulary of the Fante dialect including possessive noun phrases and conjugation of verbs. I integrated this Fante data with Asante data in order to make a foundation of comparative studies between the two dialects. Lastly, I did two presentations on the tone of Akan by comparing the Asante and Fante dialects.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：アカン語 語彙集 声調

1. 研究開始当初の背景

(1) アカン語(ガーナ: ニジェール・コンゴ語族クワ語派)は、アフリカ諸語の中では比較的研究されてきた言語であるが、資料は現在も非常に限られている。辞書は、信頼のおけるものとしては Christaller による Dictionary of the Asante and Fante Language Called Tshi (1933)が唯一のものであり、文法書も、包括的に扱われたものとしては Christaller の A Grammar of the Asante and Fante Language called Tshi (1875)以外になく、音声、音韻論に関するものとしても Dolphyne の The Akan (Twi-Fante) Language, Its Sound Systems and Tonal Structure (1988)、Schachter and Fromkin の A Phonology of Akan: Akuapem, Asante, Fante (1968)があるのみである。これらの研究には不十分な点やデータの偏りもある。Christaller (1933)以降のデータがほとんどないことや、動詞の活用形や所有名詞句などの体系的なデータがないことも問題である。報告者はこれまで、アカン語アサンテ方言の記述研究に取り組んできた。博士論文「アカン語アシャンティ方言の研究 特に音韻を中心として」(2006)執筆にあたり、数千の語彙(派生語、複合語を含む)および所有名詞句の声調、動詞の8つの活用形の声調を収録、記述した。これに類する資料は他にない。ただし、このデータには再チェック、追加調査、編集などが必要である。

(2) アカン語のデータの再構築が必要なもう1つの理由は、先行研究で明らかにされているように、アカン語に通時的変化が顕著なことである。その程度は、1方言の共時的研究においても無視できないほど大きなものである。通時的変化は、共時的には方言差として現れる。通時的変化が指摘される主なものは、母音調和と声調である。しかし、アカン語の記述研究において通時的変化の重要性が認識されているにも関わらず、方言間の

体系的比較研究はこれまでほとんどなされていないのが現状である。

2. 研究の目的

(1) 上記を踏まえ、アカン語の8方言(アサンテ方言、ファンテ方言、アクアペム方言、アゴナ方言、ダンチラ方言、アセン方言、アチム・ボソメ方言、クワウ方言、アハフォ方言)のうち、現地で標準語とみなされ、先行研究でも取り上げられてきた3方言、すなわちアサンテ方言、ファンテ方言、アクアペム方言の共時的データを構築する。語彙だけでなく、特に通時的変化が顕著である所有名詞句や活用形の声調についても資料収集、データ化する。最終的に、これを語彙集として刊行する。

(2) (1)により、アカン語研究における母音調和、声調など歴史的変化が絡んだ問題に取り組むための基盤を作る。同時に、そういった未解決の課題への取り組みを開始する。

3. 研究の方法

本研究の遂行にあたってとった方法は以下のとおりである。

(1) まず、これまで収集してきたアサンテ方言のデータを分類・整理する。データの再チェックを行いつつ、後に収集予定の他方言との比較にそなえ、品詞や母音調和・非調和の別、声調タイプなどの情報を付す。また、必要に応じて、東京在住のインフォーマントとデータの再チェックや追加調査を行う。さらに、語彙集として刊行するために編集する。

(2) ファンテ方言のデータを収集する。調査は、ファンテ方言が話される沿岸部で行う。アサンテ方言のデータに基づき、語彙、所有名詞句、動詞活用形を中心とするデータを記述、収録する。調査は、予備調査も含め、22年度、23年度、24年度にそれぞれ約1か月間行う。

(3) (2)で収集したデータをエクセル上でデー

データベース化する。このとき、アサンテ方言のデータと並列させ、比較できるような形にする。

(4) (2)のデータを用い、アカン語の通時的変化、特に近年起こった通時的変化について考察する。特に声調に関して通時的変化が絡んだ未解決の問題に取り組む。

4. 研究成果

(1) ガーナ沿岸部における現地調査により、これまで収集してきたアサンテ方言に対応する、ファンテ方言の語彙および所有名詞形、動詞活用形をすべて記述、収録、データ化した。この調査は、やむを得ず途中でインフォーマントを変えなければならない状況が生じるなどのトラブルがあり、当初の予定以上に時間がかかったため、予定していたイースタン州でのアクアペム方言の調査は、断念せざるを得なかった。しかし、その点を差し引いても、アサンテ方言とファンテ方言の体系的なデータを構築し、両方言の比較研究の基盤を整えることができた。

(2) これまで収集してきたアサンテ方言のデータの再チェック、追加調査、編集作業を行った。ファンテ方言調査の過程で、逆にアサンテ方言の再調査が必要な問題が浮上するなどしたため、作業は予想以上に時間がかかったが、編集、最終チェック作業はほぼ終了に近づいており、早ければ今年の秋、遅くとも今年度末までには語彙集を刊行できる見通しである。残念ながら、アクアペム方言は調査を実施できず、また、ファンテ方言のデータは、おそらくインフォーマントが他言語、他方言と接触していたために生じたと思われる発音や声調面での不規則性や疑問点が少なからずあり、複数方言を併記した語彙集は断念せざるを得なかったが、アカン語 英語 日本語の世界初の語彙集となり、また、声調記号、名詞のクラスなどの情報も付した、唯一の現代アカン語の語彙集となる。語彙集

が刊行されれば、アカン語やアフリカの言語研究者だけでなく、ガーナで研究や仕事に携わる多くの日本人にも役立ててもらえると確信する。

(3) アサンテ方言とファンテ方言のデータを用いた対照研究により、2回の学会発表を行った。まず、7th World Congress of African Linguistics (於 カメルーン、ブエア大学)では、Tonal Behavior of Heavy and Light Syllables in Akan Nouns と題し、伝統的に言われているようにアカン語の声調負担単位を CV、C としたのではアサンテ方言とファンテ方言の名詞の声調のパターンを説明できず、Stewart (1976) のいう heavy syllable と light syllable を区別する必要があると主張した。また、第 27 回日本音声学会全国大会 (於 金沢大学) では、「アカン語の音節構造と声調負担単位」と題し、同じくアサンテ方言とファンテ方言の名詞の声調に焦点を当て、声調に関して1単位としてふるまう CVS(V) と 2 単位としてふるまう CVS(V) があることを指摘し、それぞれ/CVS/、/CVSV/ であるのが妥当であると主張した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計2件)

古閑恭子、アカン語の音節構造と声調負担単位、第 27 回日本音声学会全国大会、2013.9.28、金沢大学

Koga, Kyoko, Tonal Behavior of Heavy and Light Syllables in Akan Nouns, 7th World Congress of African Linguistics, 2012.8.24, University of Buea, Cameroon

[図書](計3件)

塩田 勝彦、古閑 恭子 他、溪水社、ア

フリカ諸語文法要覧、2012、1-14

砂野 幸稔、古閑 恭子 他、三元社、多
言語主義再考—多言語状況の比較研究、2012、
564-594

多摩アフリカセンター、少年ケニアの友東
京支部、古閑 恭子、春風社、アフリカに暮
らして—ガーナ、カメルーンの人と日常、
2012、92-97

〔その他〕(計2件)

古閑恭子、アカン語、地球ことば村・世
界言語博物館

<http://www.chikyukotobamura.org/>

古閑恭子、アフリカとことばと高知、季刊
高知、No.50、2013、52.

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

古閑 恭子 (Koga Kyoko)

高知大学 教育研究部人文社会科学系 准
教授

90306473